

黒田チカ 年譜

西暦 (M: 明治, T: 大正, S: 昭和)

- 1884 (M.17) 3月24日, 黒田平八, トクの三女として佐賀県佐賀郡松原町(現佐賀市松原) で誕生. 7人兄弟姉妹の5番目.
- 1889 (M.22) 4月, 勸興小学校尋常科入学 (学齢に達していない5歳の時. 4年生のトシ姉について毎日小学校に通いそのまま入学)
- 1897 (M.30) 3月, 尋常科4年, 高等科4年の課程を卒業
4月より1年間私立佐賀実習女学校に通学. 師範学校入学に年齢不足のため.
- 1898 (M.31) 4月, 佐賀師範学校女子部に入学.
- 1901 (M.34) 3月, 同校卒業. 4月より1年間義務奉職として小学校教諭となる.
- 1902 (M.35) (18歳) 4月, 東京の女子高等師範学校理科に入学.
- 1906 (M.39) 3月, 女高師理科卒業.
4月, 義務奉職として, 新設の福井師範学校女子部に勤務.
- 1907 (M.40) 4月, 女子高等師範学校の教官を養成する目的で設置された研究科への入学を女高師から勧められて帰学. 第一回生の保井コノに続く理科の二回生に入学. 理科の研究科生は1名で, 指導教官は平田敏雄教授. 越智キヨ, 中田クラ(共に技芸科) の2名が研究科の同期生.
- 1909 (M.42) 3月, 同研究科修了.
4月, 東京女子高等師範学校助教授に就任. 平田教授の講義実験の準備, 生徒実験の指導などを担当.
- 1911 (M.44) 東北帝国大学理科大学創設. 日本の帝国大学で, 初めて高等学校以外の傍系と呼ばれた学校出身者にも受験資格を与える.
- 1913 (T.2) 東京帝大教授の長井長義が講師として女高師理科に出講. 黒田はこの講義実験の準備を担当.
(29歳) 東北帝国大学が, 日本の帝国大学で初めて女子にも門戸開放.
長井長義の強い勧めがあって, 東北帝大理科大学受験のため6月に仙台へ行く.
9月, 東北帝国大学理科大学化学科入学, 日本初の帝国大学女子学生3名中の1人となる.
化学科の11名の合格者中, 黒田チカと丹下うめの2名が女子学生.
同年理科大学は全学年の生徒が揃い, 開学式を盛大に挙行.
- 1915 (T.4) 3年次の卒業研究で有機化学を専攻, 眞島利行教授の指導を受けることになる.
- 1916 (T.5) 1月より紫根の色素の構造研究に着手, 天然色素研究の出発点となる.
7月, 東北帝国大学化学科卒業. 日本で初の女性理学士となる. 卒業後も副手として紫根の色素構造の研究を続行.

- 1918 (T.7) 紫根の色素の構造を決定しシコニンと命名. 論文「紫根の色素につきて」を夏休みに書き上げ, 帰京.
(34歳) 9月, 東京女子高等師範学校教授に就任.
11月, 東京化学会で「紫根の色素について」の口頭発表. 同学会初の女性の研究発表である. 論文(Ku-1001) 紫根の色素について黒田の最初の研究論文を東京化学会誌に発表.
- 1921 (T.10) 4月, 文部省外国留学生として在外研究のため渡英. 日本郵船欧州航路の佐渡丸で横浜港を出帆. 約2カ月後にロンドンに到着.
オックスフォード大学でW. H. Perkin Jr. 教授のもとでフタロン酸誘導体の合成研究.
- 1922 (T.11) 論文(Ku-1002) 紫根の色素シコニンの構造について初めて外国雑誌に発表.
(Acta Phytochimica)
大正6年に東京駒込に設立された財団法人理化学研究所に, 主任研究員制度が施行され, 眞島教授も主任研究員の1人となる.
- 1923 (T.12) 6月, 2年間の留学を終え英国出発, 米国経由で8月に帰国.
郷里の佐賀で9月1日の関東大震災を知る. 東京女高師校舎焼失.
11月, 上京.
論文(Ku-1003) 英国でのPerkin教授との研究をJ. Chem. Soc. に発表.
- 1924 (T.13) 1月より理化学研究所嘱託となり, 新設の化学1号館の眞島研究室で紅花の色素の構造研究を開始. その後の研究活動は理研で行うことになる. 女高師理科の授業と生徒実験のために, 1日に何回も徒歩で往復する.
- 1926 (S.1) 12月, 理化学研究所研究員となる.
- 1929 (S.4) 論文(Ku-1004, 05, 06) 紅花の色素の構造決定の第1, 2, 3報を速報としてProc. Imp. Acad. に発表.
(45歳) 紅花の色素カーサミンの構造を決定. この研究により理学博士の学位を東北帝国大学より授与される. 学位論文「紅花の色素カーサミンの構造決定」.
東京女高師理科の先輩, 保井コノに次ぐ2番目の女性理学博士となる.
- 1930 (S.5) この頃より身近な植物, つゆくさの青い花汁, 茄子の皮, 黒豆の皮, 紫蘇の葉などの色素の研究を行う.
論文(Ku-1007, 08) 紅花の色素カーサミンの構造 第1報, 第2報をJ. Chem. Soc. に発表.
論文(Ku-1009, 10) 紅花の色素カーサミンの構造 第1報, 第2報を日化誌に発表.
論文(Ku-1011, 12) 紅花の色素カーサミンの構造 第1報, 第2報をSc. Pap. I. P. C. R. に発表.
総説(Ku-1013) 天然色素, シコニン及びカーサミンについて日本学術協会報告に発表.
- 1931 (S.6) 論文(Ku-1014) 青花の色素の構造研究をProc. Imp. Acad. に発表.
- 1932 (S.7) 論文(Ku-1015, Ku-1016) カーサミンの構造に関連し, カルコン同族体の合成第1報, 第2報をSc. Pap. I. P. C. R. に発表.
論文(Ku-1017, 18) カルコン誘導体の合成研究第1報, 第2報を理研彙報に発表.
論文(Ku-1019) 簡単な微量分析について日化誌に発表.

- 1933 (S.8) 論文(Ku-1020) 黒豆の皮の色素第1報をProc. Imp. Acad. に発表.
論文(Ku-1021) 茄子の皮の色素についてProc. Imp. Acad. に発表.
論文(Ku-1022) 青花の色素第2報をProc. Imp. Acad. に発表.
論文(Ku-1023) 黒豆の色素第2報をProc. Imp. Acad. に発表.
- 1934 (S.9) 論文(Ku-1024) 小豆の色素の研究をProc. Imp. Acad. に発表.
- 1935 (S.10) 論文(Ku-1025) 紫蘇の葉の色素の研究をProc. Imp. Acad. に発表.
論文(Ku-1026) 黒豆の皮の色素第3報をProc. Imp. Acad. に発表.
論文(Ku-1027) 茄子の皮の色素第2報をProc. Imp. Acad. に発表.
論文(Ku-1028) 青花の色素第3報をProc. Imp. Acad. に発表.
- 1936 (S.11)
(52歳) 紅花の色素の構造研究に対して、日本化学会より第一回眞島賞を受賞.
論文(Ku-1029) 青花の色素の研究をまとめてBull. Chem. Soc. Jpn. に発表.
論文(Ku-1030) 黒豆の皮、茄子の皮、紫蘇の葉の色素の構造研究をまとめて、Bull. Chem. Soc. Jpn. に発表.
1935年に、紫根の色素に似たアルカンナの色素、アルカニンに光学活性をもつ構造がドイツで報告され、シコニンの構造の再検討を行う。その結果、先に報告したシコニンの構造を修正、論文(Ku-1031)をProc. Imp. Acad. に発表。
随筆「青酸加里の思ひ出」を科学知識に執筆。
- 1937 (S.12) 論文(Ku-1032) シコニンの構造の再検討をProc. Imp. Acad. に発表.
- 1938 (S.13) 論文(Ku-1033) シコニンの構造の再検討第2報をSc. Pap. I. P. C. R. に発表.
シコニンの構造再検討終了。
- 1939 (S.14) シコニンの構造に関連して、ナフトキノ系色素(モウセンゴケ、結核菌のフチオコール、ナフトプルプリン等)の合成研究を始める。
論文(Ku-1034)ナフトキノ誘導体の合成をProc. Imp. Acad. に発表。
日本産ウニの刺の色素、スピノクロムの構造研究を始める。
- 1940 (S.15) 論文(Ku-1035)スピノクロム研究第1報をProc. Imp. Acad. に発表.
- 1941 (S.16) 12月8日、日米開戦。
- 1942 (S.17) 論文(Ku-1036)ナフトキノ系色素研究をProc. Imp. Acad. に発表。
論文(Ku-1037)ウニの刺の色素の構造研究第2報をProc. Imp. Acad. に発表.
- 1944 (S.19) 論文(Ku-1038)ナフトキノ誘導体の合成研究をProc. Imp. Acad.に発表。
論文(Ku-1039)ウニの刺の色素の研究をProc. Imp. Acad. に発表.
- 1945 (S.20) 8月15日、第二次世界大戦終わる。
- 1949 (S.24)
(65歳) 6月、戦後の学制改革により、お茶の水女子大学発足、同大学教授に就任。
玉葱の外皮の色素の研究を始める。

- 論文(Ku-1040) 玉葱の外皮の色素の構造研究第1報をProc. Japan Acad. に発表.
随筆「英國留学の思出」を新女子教育に執筆.
- 1950 (S.25) 論文(Ku-1041) ウニの刺の色素, スピノクロムの研究をProc. Japan Acad. に発表.
- 1951 (S.26) 論文(Ku-1042) 日本の玉葱の外皮にもケルセチンが含まれることを確認, J. S. R. I. に発表.
論文(Ku-1043) ナフトキノ系色素の研究を, お茶の水女子大学自然科学報告の第1巻に発表.
論文(Ku-1044) ナフトキノ誘導体の合成をProc. Japan Acad. に発表.
論文(Ku-1045) スピノクロムについての研究をJ. S. R. I. に発表.
論文(Ku-1046) ナフトキノ誘導体の研究をN. S. R. O. U. に発表.
- 1952 (S.27) 1月, 玉葱の外皮から得られるケルセチンが, 血圧降下作用を持つであろうとのヒントを正月休みに読んだ薬学雑誌の論文から得て, 早速着手.
(68歳) 3月, お茶の水女子大学に停年制が施行されて退官, 名誉教授となる.
8月, 理化学研究所(1946年~1958年は科学研究所) に停年制が施行され囑託となる.
12月, 玉葱の外皮からケルセチンの結晶100gを取り出すことに成功. これから錠剤が試製され, 血圧降下作用が試された. 1953年12月に特許を得, 実用化, 工業化に成功しケルチンCとして市販された.
論文(Ku-1047) ナフトキノ系色素の研究をJ. S. R. I. に発表.
お茶の水女子大学非常勤講師として, 週一回の有機化学特別講義を担当. 1963年まで続ける.
- 1953 (S.28) 論文(Ku-1048) ウニの刺の色素の研究をProc. Japan Acad. に発表.
論文(Ku-1049) ナフトキノ系色素の研究をJ. S. R. I. に発表.
- 1954 (S.29) 論文(Ku-1050) ウニの刺の色素の研究発表. その後論文(Ku-1051~56) ウニの刺の色素, スピノクロムについて, 主に共同研究者, 岡嶋正枝により1955年から1967年にわたって, すべてProc. Japan Acad. に発表されている.
ナフトキノ系色素に関する上記の研究「生物界におけるナフトキノ誘導体研究の今昔」を化学と工業に執筆. (Ku-1057)
- 1956 (S.31) 「池田菊苗先生の追憶」を池田菊苗博士追憶録に執筆.
- 1957 (S.32) 随筆「お門ちがいの訪問」を数学教室に執筆.
随筆「化学の道に生きて」を婦人の友に執筆.
随筆「不思議にめぐりあった窒素化合物」を実験化学講座月報に執筆
- 1958 (S.33) 「ウニ類の色素群」を実験化学講座に執筆. (Ku-1058)
- 1959 (S.34) 1月, 天然色素の有機化学的研究により, 紫綬褒章受賞.
(75歳) 随筆「モノクロル酢酸の思い出に微笑む」を大有機化学ニュースに執筆.
随筆「植物色素研究に親しんだ筋道」を日本薬剤師協会雑誌に執筆.

- 1960 (S.35) 請われて、日本婦人科学者の会の名誉顧問となり、ひき続いて名誉会長となる。
「長井長義先生の御名を称へて」を長井長義伝、日本薬学会編に門下の1人として執筆
- 1961 (S.36) 理化学研究所客員となる。
「真島利行博士米寿記念」を 化学の領域に分担執筆。
随筆「おなじお釜のご飯」を化学と工業に執筆。
- 1962 (S.37) 随筆「日本分析化学会の10周年記念にあたり感想」を分析化学に執筆。
- 1964 (S.39) 随筆「結晶美と純真(心) 美」を化学大辞典月報に執筆。
- 1965 (S.40) 勳三等寶冠章受賞。
(81歳) 随筆「化学に親しむ悦びと感謝 I-III」を化学教育に執筆。
随筆「感謝」をお茶の水女子大学図書館月報に執筆。
- 1966 (S.41) 随筆「化学に親しむ悦びと感謝 IV-最終回」を化学教育に執筆。
4月、富士写真フィルム(株) で講演。
日本婦人科学者の会の例会には、12月の忘年会への出席が最後となる。
- 1967 (S.42) 随筆「半世紀前の東北大学時代をしのびて」を化学に執筆。
1月頃から体調を崩し、8月には日本医大病院に入院。9月、養子黒田吉男が副院長を勤める福岡市の九電病院に日航機で転院。
- 1968 (S.43) 随筆「化学の道へ導いて下さった恩師のことども」が化学と工業に掲載される。
随筆「結晶と恩師」が科学朝日5月号に掲載される。これは前年から執筆依頼を受けていた原稿に、病床で1月頃に加筆されたものである。
(84歳) 7月頃から食欲低下、9月頃から次第に衰弱し、11月8日午後1時少し前に逝去。従三位に叙せられる。